

イエスのベタニアへの旅

ヨハネ福音書11:7-16

【新改訳 2017】

- 11:7 それからイエスは、「もう一度ユダヤに行こう」と弟子たちに言われた。
- 11:8 弟子たちはイエスに言った。「先生。ついこの間ユダヤ人たちがあなたを石打ちにしようとしたのに、またそこにおいでになるのですか。」
- 11:9 イエスは答えられた。「昼間は十二時間あるではありませんか。だれでも昼間歩けば、つまづくことはありません。この世の光を見ているからです。」
- 11:10 しかし、夜歩けばつまづきます。その人のうちに光がないからです。」
- 11:11 イエスはこのように話し、それから弟子たちに言われた。「わたしたちの友ラザロは眠ってしまいました。わたしは彼を起こしに行きます。」
- 11:12 弟子たちはイエスに言った。「主よ。眠っているのなら、助かるでしょう。」
- 11:13 イエスは、ラザロの死のことを言われたのだが、彼らは睡眠の意味での眠りを言われたものと思ったのである。
- 11:14 そこで、イエスは弟子たちに、今度ははっきりと言われた。「ラザロは死にました。」
- 11:15 あなたがたのため、あなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいきます。さあ、彼のところへ行きましょう。」
- 11:16 そこで、デドモと呼ばれるトマスが仲間の弟子たちに言った。「私たちも行って、主と一緒に死のうではないか。」

【祈りながら考えよう】

- (1) 主が「もう一度ユダヤに行こう」と言われた時、弟子たちが恐れを感じたのはなぜですか。
- (2) 聖書でキリスト者の死が「眠りについた」と表現されるのはなぜですか。
- (3) ラザロが死んだというのに、主は「わたしは……喜んでいきます」と言われたのはなぜですか。

【解 説】

(1) もう一度ユダヤに行こう

主が「もう一度ユダヤに行こう」と語られた時、弟子たちの当惑した様子が描かれている。そこは、ついこの間ユダヤ人たちがイエスを石打ちにしようとした場所であり、そこに引き返すのは危険の真ただ中に飛び込むようなものであった。ガリラヤ出身の臆病な弟子たちは、そのような行動の必要性を理解できなかった。「またそこにおいでになるのですか」と、彼らは声を荒立てた。これに似た事態は、時として私たちの身にも起こる。しばしば主のしもべは、この弟子たちのように、とまどい、当惑するような境遇に置かれる。その目的や意図が全く分からないような所に導かれ、尻込みするのが当然で、自分からは決して選択しないような立場に立たせられる。

そのような時こそキリスト者は、信仰と忍耐力を発揮しなければならない。主は、そのしもべがたどるべき最善の道を知っておられ、適切な仕方、目的の所へと導いておられるのだと信じるべきである。自分の置かれた境遇は、信仰を鼓舞し、あるいは隠れた罪を点検するのに必要なものだと確信して平安を得る場合がある。

その旅の一步一步には意味があったと知る日がやって来る。もしも十二弟子がユダヤに連れ戻されなかったなら、ベタニアでの素晴らしい奇蹟を目撃できなかったのである。

(2) 昼間歩けば、つまづくことはありません

イエスは答えられた。「昼間は十二時間あるではありませんか。だれでも昼間歩けば、つまづくことはありません。この世の光を見ているからです。しかし、夜歩けばつまづきます。その人のうちに光がないからです。」(9-10節)

小心な弟子たちの忠告に対してイエスがなされた答は注目に値する。「恐れるな」と直接に答える代わりに、まず1つの格言を引用し、その表現から、旅行者が旅する場合に選ぶ時間帯についての一般論を述べられる。結論は示さず、弟子たちが自分で判断するように仕向けられた。イエスは答えられた。

「一日の労働時間は十二時間あるではありませんか。旅人がこの日中の十二時間の間に旅をすれば、道はよく見え、つまづいたり、倒れたりはありません。太陽がその道を照らすからです。ですが、もし旅人が常識外れに真夜中に旅すれば、恐らく、足下を照らす光がないために、つまづいたり、倒れたりします。わたしとても同様です。

わたしの昼間の働き、伝道活動の十二時間は、まだ終わっていません。その時が来る前に、わたしの生命がそこなわれる恐れはありません。使命を果たし終えるまで、殺されたりはしません。わたしの時が来るまでは、安全であり、髪一筋さえも害されることはありません。太陽の輝きの下を旅する者のように、わたしは倒れません。もはや地上を歩かないような夜がすぐにやって来るでしょう。ですが、まだ夜ではありません。わたしの地上の働きには十二時間あり、その終わりの時はまだ到来していません。」

(3) 肉体の復活を表す眠り

イエスはこのように話し、それから弟子たちに言われた。「わたしたちの友ラザロは眠ってしまいました。わたしは彼を起こしに行きます。」(11節)

聖書では、しばしば人が死んだ時、これを眠ると言う(使徒7:60/そして、ひざまずいて大声で叫んだ。「主よ、この罪を彼らに負わせないでください。」こう言って、彼は眠りについた)。

「眠る」とは「死ぬ」の意である。人が経験する最も辛い出来事をやさしく穏やかに言い表すことばであり、死の後に復活があることを思う時、最適な表現と言える。

死は消滅ではない。眠る人のように、一時的に横たわり、また復活して起き上がる。これは比喩的表現であって、肉体が復活するということを表しているもので、決して魂の眠りを意味するものではない。肉体の死後も魂は活発に活動しているが、肉体は眠っている人のように、聞くことも、話すことも、動くこともできないため、このように表現される。ところが、このユダヤ的表現法も、弟子たちには正しく理解できなかった。彼らはこう言っている。

「主よ。眠っているのなら、助かるでしょう。」(12節)

弟子たちは、「眠り」が死の比喩であることに気づかず、眠っているのなら、そのうちに起きるわけで、わざわざ起こしに行く必要はなく、ましてや身の危険も顧みず、そんな所へ行くことはないと考えていた。

(4) ラザロは死にました

イエスは、ラザロの死のことを言われたのだが、彼らは睡眠の意味での眠りを言われたものと思ったのである。そこで、イエスは弟子たちに、今度ははっきりと言われた。「ラザロは死にました。」(13-14節)

このところでついにイエスは弟子たちに向かってラザロの死の事実性を、包み隠さず、明らかに告げられた。主はこの一件を実に穏やかに持ち出し、痛々しい事実に対して人々の思いを徐々に整えていかれた。初めには理由も告げず、ただ「もう一度ユダヤに行こう」とだけ語られた。次には、「ラザロは眠っています」と告げ、最後に、「ラザロは死にました」と明言された。この三段階には人々の感情への思いやりが込められている。偉大な救い主がやさしく配慮に富む心を持っておられるのを知るの、大きな慰めである。これは、特に悲しい事実を告げるような場合に、隣人にやさしく接する必要があるという示唆に富む教訓となる。

(5) わたしはあなたがたの益のために喜んでいきます

あなたがたのため、あなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいきます。さあ、彼のところへ行きましょう。」(15節)

これは、「あなたがたのため、わたしがその場にいなかったことを喜びます。それは、あなたがたが信じる者となるためです」との意である。イエスが言おうとされたのは、ラザロが病気になった折にベタニアにいなかったこと、彼が死ぬ前にいやしをすればできたのに、行わなかったことを喜ぶという内容である。

その結果が今、弟子たちにとって益となる。彼らの信仰は、一度死んだラザロが復活させられるというとても奇蹟を目撃することで大きな支えを与えられる。そのようにして、ある意味において、大きな不幸の中から素晴らしい祝福が導き出される。今しがた人々が耳にした内容は、悲しく嘆かわしく感じられるが、主イエスは、終わりに彼らの信仰が大いに強められることを思っておられる。

イエスは、個々の人が苦しみ、嘆き、死んでいく姿を見て喜んではおられない。そうではなく、ある人々の苦悩を通して大勢の人に益が及ぶのを喜んでおられる。一部の人の試練によって多くの人々が教訓を得るために、その苦しみを許容しておられるのである。この世に災いや不幸が許容されているのは、多くの人々の益のためある。私たちが神の許容される試練に会う時、この点を覚えていなければならない。神がすぐに助けに来て、苦しみを取り除き去って下さらないには深い理由があるのだと信じなければならない。

(6) 主と一緒に死のうではないか

デドモ(ふたご)と呼ばれるトマスは、「私たちも行って、主と一緒に死のうではないか」と言っている。トマスの名は、ヨハネ14章5節、20章24-27節にも記される。いずれの場合も同じように、いつでも物事の消極面を見、状況は悪くなると考え、懐疑と恐怖心とをあおるような姿で登場する。

ヨハネ14章5節で彼は、イエスがどこに行こうとされるのかわからない。20章25節では、主が復活されたことが信じられない。このところでは、主がユダヤに戻れるとすれば、危険と死ぬことしか考えられない。

とはいえ、彼は正直で、忠実な人物であった。死が待ち構えていようとも、キリストを見捨てたりはしない。そこで他の弟子たちにこう呼び掛ける。「私たちも行って、主と一緒に死のうではないか。もしユダヤに帰って行けば、きっと殺される。だが、主と一緒に殺されても本望ではないか。」

主の弟子たちの性格がいかに多種多様であったかに注目しよう。熱心と早合点で突っ走るペテロは、すぐに意気消沈するトマスとは正反対であったが、双方とも信仰を持ち、双方ともキリストを愛していた。

イエスの公生涯の折には、これほど落胆しがちであったトマスが、教会史によれば、後にはインドに最初に福音を伝えた使徒となり、他の誰よりもはるか東方まで進んで行った。

